

まだ見ぬ鈔本『論語義疏』(七)

影 山 輝 國

藤貞幹と『論語義疏』

二〇二〇年一〇月七日―一〇月一三日まで丸善・丸の内本店4階ギャラリーで開かれた第32回慶應義塾図書館貴重書展示会「古代中世 日本人の読書」において展示された卷子装の鈔本、梁皇侃撰『論語義疏』巻五 子罕・郷党篇には本当に驚かされた。このようなものが出てくるとは夢にも思わなかったからである。

展示会で販売された図録で、解説を書かれた慶應義塾大学附属研究所斯道文庫の住吉朋彦教授によれば、

・当該本の縫印「藤」と読み方の不明な「草名」が、東京国立博物館蔵の唐鈔本『史記』巻二十九のものと同じであること、また、もう一種の印も古代の官印に類

することから、当該本は藤氏の所管に係り、それ以前の書写と思われる。

・書かれている文字が偶かに北魏の碑文や敦煌文書と筆画を同じくする一方、唐代正統の楷書体からは大きくかけ離れた未定の字体を数多く擁し、楷書完成以前の字様を呈している。

ことなどから、「当該本を、遣隋使や遣唐使によってもたらされた、隋以前の鈔本と推定する」という。まことにその通りならば、これは国宝級の代物である。なにせ、現存している鈔本は敦煌発見の唐代卷子本を除き、すべて日本人が書き写したものであるのに対して、この鈔本は中国で、それも作者皇侃の死後それほど経たないうちに書き写された可能性があることになるのだから。

この鈔本はある古書店から二〇一七年に慶應義塾大学にもたらされ、斯道文庫のメンバーを中心とする十五名からなる研究会が組織されて、今回の発表になったとのことである。

図録解説によれば、この鈔本は、江戸時代に藤原貞幹の『好古雜記』及び『好古日録』で言及されているとのことである。いま両書を引用すると、

論語主侃疏 三字大字卷第五子罕郷黨 零本一卷壬生家藏 卷長九寸紙弘一尺八寸五分 詳紙性八百年許本 罫七寸五分 上九分 下六分 弘五分五厘〇合縫各朱記二面及草名

（『好古襟記』下 天理図書館蔵本）

論語 皇侃疏

紙性ヲ以考ルニ八百餘年ノ本、每合縫朱記及花押アリ
テ其字讀ベカラズ、惜ムベシ

（『好古日録』（十七）古本^(三)）

とあり、同解説によれば、『好古雜記』及び当該本に後筆ながら「壬生家藏」とあることから、「当該本は、壬生家の管掌した官庫に由来する可能性がある」と推定された。

藤原貞幹は享保十七年（一七三二）六月二十三日、京都に生まれ、藤原は姓、貞幹は名である。字は子冬、通称は叔藏、修して藤原貞・藤原叔藏などと称し、蒙斎・無仏斎などとも号した。若年から好古の癖があり、多くの資料を収集し、古文書・金石文・有職故実に造詣が深く、篆書・草書の技にも長じていた。寛政九年（一七九七）八月十九日に病没した。享年六十六である。

図録解説では触れられていないが、貞幹の「無仏斎手簡」という書簡集が『日本藝林叢書』第九卷^(三)に収められており、その下巻の寛政四年三月十九日附の立原甚五郎^(四)宛書簡に

一 論語皇侃義疏古本所持仕候、尚書よりも古き本にて御座候、御用ニ相立事ニ候ハ、何時成共入貴覽可申候

とあり、寛政四年三月十九日の時点では、貞幹が所蔵していたようだ。この手紙に対して立原甚五郎がなんと返事をしたのかは今のところ不明である。

その後、この鈔本がどうなったのか調べていたら、貞幹から柴野栗山^(五)に宛てた寛政六年九月五日附の書簡中に当該鈔本に関する言及があることに気づいた。そこには、

皇侃義疏ハ一摺紳家より無理所望にて差出し申候

とあつたのである。これは「蒙斎手簡」という貞幹の柴野栗山に宛てた書簡集に収められたものであり、静嘉堂文庫と国立国会図書館にその写本が所蔵されている。国立国会図書館の写本を翻刻した松尾芳樹の「藤原貞幹書簡抄『蒙斎手簡』(上)(下)^(六)」によれば、

下巻の末尾には「右藤叔藏貞幹與柴野栗山書 文化十年秋八月以此君堂本寫之 小宮山昌秀」という墨書がある。この記述より、本書が京都の考証学者藤原貞幹が江戸の儒者柴野栗山に宛てた書簡抄であることが明らかとなり、此君堂すなわち立原翠軒の所蔵するところを小宮山楓軒が書写したものであることが分る。小宮山昌秀は楓軒の号で知られる水戸藩の農政家であり、此君堂は同じ水戸藩の儒学者立原翠軒の号である。翠軒は楓軒の師であつたから、本書は師弟間に借覽書写されたものといえる。

とある。松尾氏は静嘉堂文庫本(小宮山楓軒叢書第22・23冊)は小宮山楓軒自写本と見られ、国立国会図書館本は小宮山本を書写したものであることが明らかであると注記さ

れる。また静嘉堂文庫本については校合の機会が得られなかったとも述べられているので、静嘉堂文庫本と国会図書館本の当該箇所画像とその翻刻を左に掲載しておく。

纂図互注孟子全部先頃得申候、環翠軒手澤之書と被存候、巻尾二明応之年号御坐候へ共月日下ノ名、墨にて塗り申候而讀め不申候、文龜中ノ校合ノ奥書も相見申候、宣軒^{押花}も相見へ申候、年号ハ右之通ニ御坐候へ共、本ハ夫よりも古ク相見申候、書經ハ屋代所望にて譲り、皇侃義疏ハ一摺紳家より無理所望にて差出し申候、孟子ノ古写本ハ明經家に二て講尺等も無之故歟、是迄心かけ申居候へ共、一部も出不申候、今度不存寄手ニ入申候、九月五日

(松尾氏の翻刻を参考にし、若干の訂正を加えさせていただいた)

藤原貞幹について調べてみると、毀譽褒貶相半ばし、なかなか一筋縄ではないかな人物であつたらしいことが窺える。彼の事績を最も早く、かつ詳しく論じたものは吉澤義則^(七)である。また昭和の初めから貞幹について着目し、静嘉堂文庫等に残る彼の著作を検討して、その業績を紹介したのは川瀬一馬^(八)である。両者は貞幹の考古・考証に関する実証的な研究手腕を認め、近世中期の日本古代文化研究者

幕閣互に盡く令知是の如くし環斎手澤しお
 と云ふ。巻尾に「明應し通号つて」て月りた、
 名墨もく空りての空のふり、文意中、校
 合ノ奥にもある、以て宣長もたて、以て年
 号ハなくして、つて「あふより」も古くあ
 りし書信ハ代わりの、譲り宣長親流ハ一掃
 仲家ノ手澤の如く多し、以て宣長、古くあ
 りし書信ハ代わりの、譲り宣長親流ハ一掃
 仲家ノ手澤の如く多し、以て宣長、古くあ
 りし書信ハ代わりの、譲り宣長親流ハ一掃

蒙齋手簡（国立国会図書館本）

幕閣互に盡く令知是の如くし環斎手澤しお
 たり巻尾に「明應し通号つて」て月りた、
 名墨もく空りての空のふり、文意中、校
 合ノ奥にもある、以て宣長もたて、以て年
 号ハなくして、つて「あふより」も古くあ
 りし書信ハ代わりの、譲り宣長親流ハ一掃
 仲家ノ手澤の如く多し、以て宣長、古くあ
 りし書信ハ代わりの、譲り宣長親流ハ一掃

蒙齋手簡（静嘉堂文庫本）

として高く評価している。だが、大正の初めにはすでに、
 貞幹に偽造癖があることが指摘されている。高橋健自は「古
 瓦に現れたる文字」^(九)の中で、「藤貞幹は安永五年『古瓦譜』
 を編して之を知人に頒てり。…然れども熟々此書を閲する
 に、古瓦文字の殆ど半は捏造したるものと認むべし」と述
 べている。

そもそも江戸時代には、貞幹に対する批評はかなり辛辣
 なものがある。その主なものを挙げると、

まず貞幹と同時代の本居宣長（一七三〇—一八〇二）は、
 貞幹の『衝口発』^(十)を読んで猛反発し、『鉗狂人』^(十一)を著して、
 その冒頭に「ひとへに狂人の言也」と貞幹を批判した。貞
 幹が「皇統」の項で「或記云、神武天皇御母ハ玉依姫、葦
 不合尊ノ御子ニハマシマス、御年モ葦不合尊ヨリハ長シ
 玉ヘリ、其先ハ呉ノ泰伯ノ苗裔ヨリ出サセ玉フ」と述べた
 のに対し、宣長は「まづ或記云といへるハ。実ハ論者の偽
 りてみづから造りたる説にして。神武天皇呉泰伯が後也と
 いふ説を信にせむがためのたくみ也」と、貞幹の論拠とす
 る「或記」が偽作であるとし、同じく「皇統」の項で貞幹
 の「日本決釈ニヨレハ、本邦モト文身ノ國ナレハ神武帝東
 征ノ後、其人入来テ其俗ノウツルモノナラム」^(十二)に対して、
 宣長は「日本決釈といへるハ。かの或記のたぐひと聞ゆ。

これ漢籍ばかりに據てハ。人の難^ムぜむことを恐れて。か、る書名を作りて證とせるなり」と、『日本決^{けつ}釈^{しやく}』も偽書であると論難した。

また、狩谷校斎（一七七五—一八三五）は、貞幹の『好古小録』（上）の金石〔十三〕「元明天皇御陵碑」の頭注^{（十一）}に以下の如く記している。

此碑今剝落シテ一字存セス、只碁局文アルノミ、貞幹カ摹刻ハ、イマタ剝落セサル已然ノ碁本ヲ以テ摹シタリト云リ、今取テ試ニ碑本ニ比校スルニ、剝落ストイヘ共、一畫ノ似タル所ナシ、イカ様ニ剝落ス^{（十二）}ト一畫ノ髣髴ハ必有モノナルニ如此ヲ以考フレハ、貞幹東大寺要録ニ此文ヲ載タルニ据テ偽作セシモノナリ、此老好テ古書ヲ贋作ス、然レ^{（十三）}凡具眼ノ人ハ皆其欺ヲ受サルナリ

「此老好テ古書ヲ贋作ス」とは、容易ならざる発言である。

さらに、校斎の門人、岡本保孝（一七九七—一八七八）は、貞幹の『好古日録』（百四）俗語

俗語皆モトヅク所アリ、物ノトリシマリナキヲシドケナシト云、シドケナシハ四度解無ナリ、物ノフツ、カナルヲブタゴト云、ブタゴハ無單^{（十四）}袴ナリ、隱座ノハツモノ、アゲクノハテ皆由來スル所アル者也

の頭注に、

保孝按、貞幹好古ノ僻アリテ博識ナレドモ、師承ノ學ナカリシコト此一條ニテシラル、タヤスク筆ハトルマジキモノゾ

と記し、貞幹が博識ではあるがまともな先生に就いて学問をしていないことを批判している。加えて保孝は、すでに塙保己一（一七四六—一八二二）が、『南朝公卿補任考』^{（十五）}によつて偽書であることを考証した『南朝公卿補任』なる書物を、実は「コレハ藤原貞幹偽造シテ」と、貞幹の偽造であると断じている。

近年の研究で、貞幹批判・擁護の論者を一人ずつ挙げる。

日野龍夫は「偽証と仮託」^{（十六）}の中で、江戸の学者の貞幹批判の議論を提示し、「偽書・偽証の背後にも、珍書を書肆に売りつけて利を得る、あるいは新説を立てて学者として

名をあげるなどの動機を推測することも可能であろう」と貞幹を手厳しく批判している。

これに対して阪本是丸は、多くの論考を発表して、「或記」「日本決釈」「南朝公卿補任」などが「偽書」であると主張することと、貞幹が作成した「偽書」であると主張することとは、本来次元の異なる問題であるとして、それらがたとえ「偽書」であるにせよ、貞幹が偽作したとするには根拠薄弱であると主張して、貞幹を擁護する論陣を張っている。^(十六)

さて新出『論語義疏』鈔本に戻ると、藤貞幹の言を信ずれば、彼はこの卷子本を少なくとも寛政四年三月十九日から寛政六年九月五日直前までの間は所持していたことになる。ただこの本を貞幹はどのようにして手に入れたのか、またこの本を無理に所望した「一搢紳家」とは誰なのか、今後の調査研究を待たねばならない。

この卷子本については、幕末に長谷川延年の『博愛堂集古印譜』に「皇侃論語義疏古本合縫所印」として「藤」字の印影が摹刻されている。^(十七)長谷川延年がどういう手段でこの本の印影を見ることができたのかも明らかでない。

また、図録解説で、貞幹以後の言及として「幕末明治の秋月藩儒、京都大学校助教で、明治九年（一八七六）秋月

の乱で自刃した磯淳^{いそじゆん}の妻子宛の遺書に、『家宝物、古写本玉篇、皇侃写本』と記しているのは（『西南記伝』下巻2）、当該本ではないかと疑われる」としているが、^(十八)磯淳所蔵の皇侃写本は室町写本で、江藤正澄の手を経て、神宮文庫に現蔵されているものであり、当該鈔本ではないと思われる。

この本の由来・真偽に関して重大な問題になるのは、この鈔本の縫印「藤」と読み方の不明な「草名」^{そうみょう}が、東京国立博物館蔵の唐鈔本『史記』卷二十九のものと一致することである。この『史記』卷二十九とは重要文化財に指定されている「河渠書」の残巻で、『容安軒旧書四種』^(十九)「目錄」によれば、もと貫名海屋（一七七八—一八六三）の須静堂旧蔵書であり、海屋没後は転々とした後、畑古雪の所蔵するところとなった。それを神田喜一郎（信暢）の祖父である神田香巖が何度も頼み込んで手に入れたものである。縫印「藤」^(二十)については、「相伝えて藤原忠平公の用いる所。『集古十種』に拠れば、延喜廿年九月公家牒の用いる所も亦た此の印と相同じければ、則ち此の巻は公の手沢^たれること復た疑うべき無し（原漢文）」という。しかしこれは神田氏の間違いで、『集古十種』に載せる藤原忠平の印と『史記』卷二十九の印とは一致しない。^(二十一)したがって新出『論語義疏』の印も藤原忠平のものではないであろう。

現在重要文化財と認定されている『史記』の縫印と「草名」が新出『論語義疏』鈔本のもとのが一致することは、新出『論語義疏』の由来を示す有力な手掛かりである。ただ貞幹自身はこの本を「紙性ヲ以考ルニ八百餘年ノ本」と言っており、隋以前に中国で書かれたものとする^(二十七)ことについては躊躇を禁じ得ない。でき得れば料紙の科学的年代測定をしていただければ大変ありがたい。炭素14を用いた測定は破壊検査なので実施は困難かもしれないが、蛍光X線分析ならば非破壊で、鉄分の有無によって中国の紙か日本の紙かが判明するそうである。

（本稿は『さいたま文学館紀要』創刊号（令和三年四月一日）に掲載した拙稿「新発見『論語義疏』雑感」を修訂したものである。また句読の無い引用文は、読みやすさを考えて適宜読点を加えた。最後に「蒙斎手簡」の画像掲載を許可された静嘉堂文庫と国立国会図書館に感謝申し上げる。）

注

（一）本鈔本の尾題は「論語疏卷第六 子罕／郷党 王侃」である。しかし「論語疏」よりも「論語義疏」の方が一般的であること。「巻第六」の「六」は後筆にて「五」と改められ、表紙にも「論語疏卷第五」と書かれていること、

さらに現在残る鈔本では「子罕・郷党」篇はいずれも巻第五に相当すること。「王侃」の「王」は「皇」の代用字であると思われること。以上を勘案してこのように表記した。

（二）『日本藝林叢書』第三卷（六合館 昭和三年）

（三）『日本藝林叢書』第九卷（六合館 昭和四年）

（四）立原甚吾郎（一七四四—一八二三）水戸藩儒。名は萬、字は伯時、甚五郎は通称。東里・此君堂・翠軒などと号した。彰考館総裁となり、『大日本史』の校訂に勉めた。

（五）柴野栗山（一七三六—一八〇七）幕府儒官。名は邦彦、字は彦輔、通称は彦助。栗山・古愚軒などと号した。昌平黌の教官となり、松平定信に勧めて「寛政異学の禁」を発せしめた。いわゆる「寛政の三博士」の一人である。

（六）（上）は『京都市立芸術大学美術学部研究紀要』第三十七号（一九九三年）、（下）は同紀要第三十八号（一九九四年）

（七）古澤義則「藤貞幹に就いて」（『国語説鈴』立命館出版部 昭和六年）

（八）川瀬一馬「古代文化研究の先覚 藤原貞幹の業績—国学としての意義—」（『続日本書誌学之研究』雄松堂書店 昭和五十五年）

（九）高橋健自『考古学雑誌』（第五卷第十二号 大正四年）

(十)『衝口発』文化十年頃刊 国立国会図書館デジタルコレクション (210.3-T0339s-III)

(十一)『鉗狂人』文政四年刊 国立国会図書館デジタルコレクション (210.3-T0339Mk-II)

(十二)『日本決釈』の本文らしきものは、『衝口発』『容飾』の項に「日本決釈云、元文身垂髪黒齒也、近江朝天下庶人令結髪止黒齒也」とある。

(十三)『日本藝林叢書』第三卷 (六合館 昭和三年)

(十四)『況斎雜記』(『況斎叢書』三 国立国会図書館蔵)「書籍考 本邦」の「公卿補任」の頭注。

(十五)日野龍夫『江戸人とユートピア』岩波現代文庫 平成十六年

(十六)阪本是丸「好古への情熱と逸脱―宣長を怒らせた男・藤原貞幹―」(『國學院大學日本文化研究所紀要』第九六輯

平成十七年)、「藤原貞幹の華夷思想と偽証心理」(『神道宗教』第一九九・二〇〇号 平成一七年)、「藤原貞幹の日

本文化研究と「偽証」」(『日本文化と神道』第二号 平

成十八年)、「『南朝公卿補任』と藤原貞幹」(『國學院大學研究開発推進センター研究紀要』第一号 平成十九年)

(十七)長谷川延年『博愛堂集古印譜』第十一「藏経書印之部」安政四年序 国立国会図書館デジタルコレクション (※図9-12) ただしその印影は「藤」字の右側の字様が新出

『論語義疏』と若干異なっている。

(十八)佐藤道生「『論語疏』中国六世紀写本の出現」(『斯文』第一三六号 令和三年三月)において氏は、当該本につ

き「その後、筑前秋月藩儒の磯淳(一八二七―七六)の所蔵が確認される」とし、「当該本ではないかと疑われる」とする住吉氏に比べてかなり断定的に述べられている。

(十九)神田信暢編『容安軒旧書四種』大正八年 国立国会図書館デジタルコレクション (420.58)

(二十)松平定信編『集古十種』巻一。

(二十一)藤原忠平の印は「藤」字の左下の「月」が「舟づき」であるのに対し、『史記』巻二十九や新出『論語義疏』の印は「月」が「肉づき」になっている。神田氏の間違ひは『経籍訪古志』に拠ったものであろう。解題叢書本『経籍訪古志』巻第三に、史記零本一卷舊鈔卷子本「…攷紙質字様當是八百年前鈔本、卷尾有藤字朱印及押字、係右大臣藤原忠平公手印、延喜二十年公家牒亦用此印」とある。なお、この『経籍訪古志』の誤りは、図録解説によればすでに太田昌二郎氏によって指摘されているそうである。

(二十二)佐藤氏は、(注十八)の前掲論文にて「南北朝末から隋初にかけての時期(六世紀)の書写であると見て誤りないものと思われる。」と述べて、「隋以前の鈔本と推

定する」とする住吉氏の考えを更に一歩進めて、「六世紀」に限定しておられる。

(かげやま　てるくに・実践女子大学名誉教授)